

住吉家研究の拡がり

—酒井抱一のやまと絵画題作品と鈴木其一の出自問題に関連して—

宮崎もも（大和文華館）

近世に勃興した流派の本家の初代や二代目などは新しい画風を確立・拡大したとして評価される一方で、それ以降の本家を継いだ絵師たちについては、流派の画風を遵守して形骸化しているとして現代では低い評価となりやすく、江戸幕府の御用を務めた住吉家についても、江戸時代前期に活躍した初代如慶・二代具慶以降の注目度は極めて低かった。しかし近年、江戸時代後期に活躍した住吉家や板谷家（住吉家の分家）の当主たちの作品を取りあげる「土佐派と住吉派 其の二—やまと絵の展開と流派の個性—」（和泉市久保惣記念美術館、2021年）、「住吉派の興隆と阿波徳島の画人たち」（徳島市徳島城博物館、2021年）といった展覧会が立て続けに開催され、発表者も住吉家五代広行を取りあげる展覧会「住吉広行—江戸後期やまと絵の開拓者—」（大和文華館、2022年）を開催し、多くの作例が知られるようになった。また、板谷家に伝来した資料群が東京国立博物館の所蔵となり、ホームページで近年画像が公開され、住吉家・板谷家が共有していたと考えられる様々な粉本や幕府に提出した書類の控えなどを容易に閲覧できるようになった。このように多く紹介されるようになった住吉家関連の絵画作例や資料の中には、住吉家と交流のあった酒井抱一やその弟子の鈴木其一の研究と関わるものがあることが注目される。

姫路藩主酒井家の家系に生まれた酒井抱一は、尾形光琳に私淑し、江戸の地に所謂「琳派」の画風を定着させた絵師として著名であるが、住吉家にしばしば古画の鑑定を依頼するなど、住吉家五代広行や六代広尚と交流があったことが知られる。抱一は光琳作品を熱心に学んだ一方で、抱一と同時代の様々な絵師たちの作品の図様や画風も吸収しており、特に玉蟲敏子氏は、抱一筆の「仁徳天皇高台図」や「五節句図」（大倉集古館蔵）の第三幅「菖蒲臺」に着目し、住吉家の作品の図様を抱一が学んでいたであろうことを早く指摘されている。本発表の前半では、「五節句図」の第四幅「乞巧奠」、第五幅「重陽宴」、「絵手鑑」（静嘉堂文庫美術館蔵）所収の「勿来関図」、「抱一上人粉本」所収の「鷹狩図」などが住吉家（板谷家を含む）の作品と類似することを加えて指摘し、宗達・光琳風以外の抱一のやまと絵画題作品の多くが、住吉家の図様を参考にしていることを明らかにする。

続いて本発表の後半では、「酒井抱一の弟子」兼「姫路藩酒井家の家臣」であった鈴木蠣潭の跡を継いだ其一について、酒井家の関連資料では、小普請水野家家来の飯田藤右衛門の甥で蠣潭の母の遠縁と記されているのに対し、其一の弟子たちの記述では紫染職人の子と記されている問題を取りあげ、住吉家・板谷家の相続関係資料に其一の出自問題を読み解くヒントがあることを指摘し、住吉家研究の進展が酒井抱一や鈴木其一研究の進展にも繋がることを具体的に示す。